



TITLE:

<図書紹介>Paraluman S. Aspillera. A Common Vocabulary for Malay-Pilipino-Bahasa Indonesia. Institute of Asian Studies, University of the Philippines, 1964,xxix+101pp.

AUTHOR(S):

崎山, 理

CITATION:

崎山, 理. <図書紹介>Paraluman S. Aspillera. A Common Vocabulary for Malay-Pilipino-Bahasa Indonesia. Institute of Asian Studies, University of the Philippines, 1964,xxix+101pp.. 東南アジア研究 1970, 8(2): 281-281

ISSUE DATE:

1970-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/55626>

RIGHT:

図 書 紹 介

Paraluman S. Aspillera. *A Common Vocabulary for Malay-Pilipino-Bahasa Indonesia*. Institute of Asian Studies, University of the Philippines, 1964. xxix+101 pp.

フィリピン人のタガログ語 (Tg.), マレーシアのマライ語 (Ml.) (インドネシアのインドネシア語) がマライ・ポリネシア語族 (MP) インドネシア語派に含まれる言語であることは、改めて説明するまでもない。しかし、今日までたとえそれらの言語が公用語であれ、それら言語間相互の辞書は作られたことがなかった。

Tg. と Ml. とは、前者が独立的に発達せしめたやや複雑な接辞法を持つほかは、その語彙 (語幹, MP 的には第二次的語根) において著しい対応を示すものが少なくない。そして比較言語学的知識がなくとも、それぞれの対応語彙をいちおうは抽出することすら容易である。

この語彙集の著者は、フィリピン大学アジア研究所のフィリピン文学助教授である。本書の目的は、東南アジアのための共通の実用言語が発展し得るような基本的リストを提供することにある (p. iii) という。しかし、このやや言語政策的な目的と、pp. xii-xxix にマラヤ大学マライ語・言語学担当の Asmah binti Haji Omar が執筆している「マライ・フィリピン・インドネシア語共通語彙への覚書」から察せられる比較言語学的に同族語となる語彙を対照して掲げる作業とは、おのずから別の事柄である。本書はこの点に関して、性格がはなはだ曖昧である。(なお、Asmah の記述には疑わしい点が多い。彼女は Dempwolff をすら読んでいないように思われる。)

さてこの語彙集は、I・II 部に分かれ、I 部は音韻形式が規則的に対応を示し意味も類似する語彙、II 部は音韻形式は明瞭な類似を示すが意味は異なる語彙、が掲げられている。しかし、I. に載せられた語彙の中にサンスクリット、アラビア語のみならず、英語、スペイン語からの借用語まで含めているのは

いったいどうしたことか。例えば、その p. 26 では Ml. muka, Tg. mukhâ “face” (サ); Ml. mēnyrat (surat), Tg. manulat (sulat) “to write” (ア); Ml. monopoli, Tg. monopoli “monopoly” (英, ス) など。比較言語学で音韻対応とは、同系諸語間についてのみいわれることを、この著者は知らないのだろうか。このような共通の借用語が語彙の大部分を占めている。一方で MP 共通祖語にさかのぼり得る例についても問題がないわけではない。Ml. pērah, Tg. pigâ “squeeze” を正しく掲げているにもかかわらず (*pəyah より), Ml. darah “blood” (*dayah より) に対して Tg. dugô “血” のかわりに Pampango 語 daya を掲げるのである。もしこのように範囲を広げてゆけば、例えば、Tg. aso “犬”, gawâ “仕事” にはジャワ語 asu, gawé が対応するから、当然、それらの語もこの語彙集に入れるべきであろう。その他、Ml. liur, Tg. lurâ “saliva”; Ml. buah, Tg. bunga “fruit”; Ml. mēnggigit, Tg. mangibit “to bite” などは誤りで、前二者は Ml. ludah “唾”; bunga “花” と対応する語である。次に、II. について、著者自身 I. との区別の基準が定かではないように見うけられる。例えば、Ml. susu, Tg. suso “breast” は I, II の両方に現われるが、これは Ml. に “胸” のほか、“ミルク” の意味があるためかと思われる。しかし Ml. pari “a kind of fish”, Tg. pari “a priest”; Ml. sorok “draw back under a cover”, Tg. sulô “torch” などを対照して、いったいどんな価値があらうか。音が似ていて意味の違う例は、あらゆる言語間において見出される。上の例では Ml. pari, Tg. page “えい (魚名)”; Ml. suloh, Tg. sulô “松明” が正しい対応例である。

いやしくも大学研究所の名のもとに真面目にこのような仕事になされたことについて、一種の感嘆と驚きを禁じ得ない。しかし I. については、細心の注意をもって利用すれば、Ml. Tg. 間の相互的理解に資するでもあらう。

(崎山理・大阪外大)